

琉球大学医学部 研究室配属実習（第二内科） 『医科学研究』 感想文

琉球大学医学部同窓会 会長賞受賞に寄せて

2024年4月22日

琉球大学 医学部医学科 3年生 月田 昌里

2023年4月のある日、春の日差しがじりじりと肌を刺す中。琉大付近のモスバーガーでバナラシェイクを飲みながら「なんだか最近、急に太った気がする」とこぼすと友人は冗談半分に「妊娠したんじゃないの」と言いました。その言葉がなんとなく引っ掛かり調べてみたところ、まさかの当たりにました。

妊娠検査薬を片手に小躍りしている夫を横目に 私は携帯で出産予定日を計算しました。12月末…。ちょうど『医科学研究』の真っただ中です。

当時、海外もしくはOISTへの学外派遣を希望し行動していた私は、この計画をあきらめざるを得ませんでした。改めて先輩方に医科学研究について相談すると、皆一様に“楽”にクリアできる研究室を選ぶべき、そして場合によっては休学も考えるべきだと言いました。私はそんな周りの反応を見て初めて“妊娠”の事の大きさを認識し、そして同時に、とてもモヤモヤとした気持ちになりました。

医科学研究の4か月は文系出身の私が大学に入り直して初めて「本気の理系の世界」に触れ 厳しい指導に揉まれながらも成長し、研究者というキャリアについて考えることのできるチャンスであったはずでした。その4か月もの貴重な時間を私はソファに寝ころんでゆったりと出産を待ち、子供を産み、ミルクをあげ、おむつを替えることに注ぎ、研究は興味ではなく 楽さ で選び、片手間で終わらせるべきなのではないでしょうか。そのような過ごし方では後悔しないだろうか と思いつつも、私は 今回が 初めての妊娠であり、自分の体調も胎児の発育も先が見えない状況です。一体どこまで頑張れるのか。もっと言うと、“どこまで頑張っているのか”。思い悩む毎日を過ごしていました。

そんな時、益崎先生に出会いました。2年生の講義はすべてオンラインで実施されたので、生身の先生に お目にかかり直接お話を聴くのは3年生の内分泌学講義が初めてのことでした。講義での先生の流麗なプレゼンテーションを聴いているうちに 内分泌・代謝学の複雑でありながらも身近なテーマの数々にワクワクしている自分に気づき、そして直

感的に「医科学研究、第二内科でやりたいな」と思うようになりました。そして先生との1対1の面談で、第二内科への基礎配属を希望しているものの、現在 妊娠しており予測不可能なことが多く 研究が続けられるか不安であることを お伝えしました。

すると 先生は、自身と胎児の体調を第一とすることが基本である と前置きしつつ、こう言いました。「妊娠・出産というイベントがあっても なお、いや あったからこそ、ここまで頑張れた。そういったプロセスや成果を残すことは、将来 必ず 月田さんや後輩の女性たちを勇気づけることになります。」 この言葉は、当時 いただいた色々な言葉の中で一番心を打ちました。私、頑張ってもいいんだ と シンプルに思えました。そしてその時、医科学研究は第二内科で お世話になろうと決めました。

研究は少し早めにスタートしました。指導教員の上間つぐみ さんに教えていただきながら、まずは PLS-DA、LefSe、多様性解析、相関解析を はじめとした、腸内細菌関連の疫学研究で用いられる多様な解析手法について解釈の仕方と使い方を学び、腸内細菌・血清代謝物・代謝障害に関連する文献を片っ端から読みました。一日中 PC を見つめていると、時間は瞬く間に過ぎ去っていきます。

そうして ようやくインプットが ひと段落し、研究のストーリーラインを作りはじめた矢先、私は娘を出産しました。年の暮れ、沖縄で最も寒い時期のことでした。出産後は、先輩ママでもある上間つぐみ さんからの助言もあり、全てをシャットダウンして半月、しっかりと休むことにしました。この休暇は ボロボロになった身体を癒し、娘と存分に触れ合い研究に向かう気力を充電することができた ととても重要な時間でした。この時間があつたからこそ 年明けにある程度、復活を遂げ、再度研究に邁進することができたと思っています。ラボ・ミーティングにおける進捗報告では「三密(=精密・緻密・綿密)：第二内科が作ったキーワード」を実現できるように、毎回できる限りの準備をして臨みました。そして益崎先生、岡本先生をはじめとした先生方の厳しくも有益なアドバイスの数々を研磨剤として、上間つぐみさんと ゴシゴシ、ゴシゴシ、昼も夜も Zoom で議論しながら 第二論文を磨いていきました。

こうして4月半ば、授業開始前ギリギリまで、英文論文の作成にコミットしました。そして医科学研究の二次選考発表会(代表戦)を終えた今日、振り返ると本当に書ききれないほど様々なことにチャレンジさせていただけたことに気付きました。妊娠したため海外に行くことはできませんでしたが期待を遥かに超える充実した研究生活でした。

第二内科で学んだ ロジカル・シンキング、プレゼンテーション・スキル、英語力、そして なにより『三密』 は、今後の医学生生活や医師としてのキャリアを積む上で非常に大切なスキルであり、これからも実践していきたいと思います。

最後に、第二内科の皆様へ感謝の言葉を述べたいと思います。いつでも何時でもミーティングで議論してくれ、私の体調を夫以上に心配し常に気遣ってくださった“沖縄の薔薇”こと 上間つぐみさん、ラボ・ミーティングで論文や発表内容についてロジカルに批評し、ブラッシュアップを助けてくださった“TEAM 岡本”の先生方、医局会で代謝・内分泌・血液学の症例発表を通して たくさんの学びを与えてくださった第二内科の先生方、同じ学生として とても良い刺激と独特の癒される空気感を与えてくださった Puff, The Magic Dragon こと 同級生の伊藤 海龍さん、医局で“サンドイッチ”と“野菜生活”を恵んでくださった教授室秘書の野口さん、本当に長期間、お世話になりました。

直接、顔を合わせる事が少なかったことが心残りですが、またポリクリ・クリクラで改めてご挨拶させていただきますと幸いです。

そして、益崎先生。同窓会会長賞を手に報告にいくと、先生は こう言ってくださいました。「一つのプロジェクトに集中することが肝要です。いくら思想が偉大でも、机上の空論に終わるのであれば意味をなさない。たったひとつでも形にすることこそに大きな意味があります。」最後まで、座右の銘にしたくらい心を打つ美しい言葉をありがとうございました。

先生の言葉は 強く 優しく しなやかで、いつもポジティブなパワーで満ちていました。今の私は、先生からみると まだ 寝がえりもできない 赤子 ですが、必ず成長し、自分の足で立ち、その姿を見せたい と思います。日が昇るがごとく成長（昌）し、人が自然と集まってくる（里）ような人物になれるよう 日々精進してまいります。

4 か月間、ご指導いただき ありがとうございました。

表彰状

医学科同窓会会長賞

月田昌里 殿

貴殿は「医科学研究」に熱心に
取り組みました
よってその成果を認めここに
副賞を添えて表彰いたします

令和6年4月22日

琉球大学医学部医学科同窓会

会長 藏下 要

